

東谷 俊哉 HIGASHITANI Toshiya
Colors of KCUA2014 INVITATION -浮遊する意識-
東谷俊哉インタビュー



[過去参考作品]

———油画を専攻された理由は何ですか。

絵を描く事は好きでしたが、当時は漫画のようなものを作る事にはまっていた。複数のイメージをつなげることで絵の中に物語を生み出し、その自分で創った仮想世界に浸る事に喜びを感じていました。今までコマを複数描いて成り立たせていた事を、一つの支持体の上で完結することへの興味から油画を専攻しました。

———制作において影響を受けたものはありますか。

「家の近くに「子ども劇場」という地域、文化活動のプラットフォームがありました。幼い頃はよく母に連れられ、キャンプや演劇、様々なワークショップに参加していました。そこでの貴重な経験が今でも大きく影響していると思います。

友達と遊ぶ時は、何をして遊ぶのかを自分達で考えて、遊びを作るところから楽しんでいました。自然に遊びが出来上がる事もありましたが、私にとって遊びを作ることが最初のモノ作りの経験だと思います。

私が幼稚園児か小学生低学年ぐらいのときに、淀川の河川敷で「親子フェスティバル」という大変大規模な催し物がありました。そこでは食べ物はもちろん、凧上げや、段ボール迷路、バザー等が行われ、当時幼いながら兄と友達とで紙パックのジュースを売っていました。お店は段ボールで作られており、子供が這う体勢でないと入れない大きさの箱に屋根とカウンターの窓が開けられた構造をしており、中にリンゴとオレンジのジュースが保管してありました。当時の感覚では、ばかでかい河川敷の広場にある隠れ家のような感覚を持っていましたが、今振り返れば大人の腰丈ほどの小さなお店が広場にぽつんと建っている様はとても可愛らしく、面白い光景だったと思います。」

——京都市立芸術大学美術学部油画を卒業後、IAMAS*へ進学された理由をお教えてください。

*IAMAS とは：岐阜県大垣市にある情報科学芸術大学院大学（Institute of Advanced Media Arts and Sciences）は英語の略称をとって IAMAS（イアマス）と呼ばれています。大学院だけの学校で、先端的技術と芸術的創造との融合を理念に掲げています。

「私の制作は五感による知覚や身体の延長としての道具に対して関心が向いております。電子機器を携帯することがあたり前となった現在、電話の機能が付属物にまで感じるスマートフォンが生活の中心となり人の一番の道具となったと言えます。携帯に限らず、こうしたマシンのエンジニアリングを学んで来た学生と刺激しあい、別の分野で活躍する工学的視点を理解し、身体と道具と環境についてより考えを深めたいと思ったからです。

今までに無かったものを発明することで人々の生活や思想に衝撃を与え、変化を与える。私個人の為のモノかもしれない作品制作が、発明のような意味を持つことが出来ればと思います。

——展覧のテーマ「招き」についてとくにどう思われますか。

「招くとは自己の中に他者を引き入れる緊張感と、他者にどう見られたいのかという欲望が渦巻く面白いテーマだと思います。」

——東谷さんは「他者にどう見られたい」とお考えでしょうか。

「どのように見られたいかという欲よりも、どのように見えたかを聞くことのほうに今興味があり、期待と不安の中で制作しております。」

——今回の展示で東谷さんは作品を体験していただいた方に、その感想をかいてもらう機会も設ける予定です。最後にお客様に一言お願いします。

「招かれるままに、作品に身を任せてみてください。」

2014.6-7 インタビュアー 京都市立芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻 修士1年田川莉那